

平成28年度第1回射水市総合教育会議議事録

1 日 時 平成29年2月24日(金)

開会 午後3時00分

閉会 午後4時15分

2 場 所 本庁舎401会議室

3 出席者

【構成員】

夏野射水市長、長井教育長、眞岸教育委員、宮原教育委員、織田教育委員、野上教育委員

【事務局説明員】

山崎企画管理部長、倉敷企画管理部次長、久々江政策推進課長、寺岡教育委員会事務局長
杉本教育委員会事務局次長、片岡教育委員会事務局副参事、原学校教育課長

4 傍聴人数 4名

5 協議等の概要

開 会

夏野市長挨拶

・昨今、核家族化や少子化が進行しており、社会や家庭に様々な影響があると言われている。特に富山県においては、高い共働き率などライフスタイルの多様化により、子供達を取り巻く環境は大きく様変わりしており、子供達が、家族と触れ合う時間や地域との関わりが薄れてきていると危惧されている。

・市では、総合戦略において、家庭や地域における教育充実を図っていくこととしている。また、教育委員会においても、昨年、射水市PTA連絡協議会と連携しながら「あったか家族3つのポイント」のリーフレットを作成したところである。

・こうした現状を踏まえ、今回の議題を「家庭教育の推進」として、意見交換していきたい。

協議事項

(1) 家庭教育の推進について(事務局説明<資料1、2、3>)

[教育委員]

・射水市は、これまでの家庭教育アドバイザーの取組や今般の「リーフレット」の作成など家庭教育支援については、他市より頑張っていると感じている。

- ・ある方が、究極の幸せとは、1つに「愛されること」、1つに「褒められること」、1つに「人の役に立つこと」と言っていた。このリーフレットには、3つのことがすべて詰まっている。
- ・家庭の事情等で家庭教育を实践できない家庭のために、あったか家族応援団を募集すればどうか。
- ・子育て支援に関わっている方が、「子どもとの声かけをきっかけに、子どもと触れ合い、その子どもの成長の姿を通して、自分自身も学ばせてもらうことができた」と言っておられた。
- ・ボランティアなどの支援を受けて、「あったか家族の愛ことば」を掛け合うことが当たり前にあるような地域づくりができればよい。

[教育委員]

- ・家庭教育の核となるのは家庭であるが、学校も含め、そこだけでは負担がかかるので、地域が重要な位置付けとなる。
- ・福岡県みやま市では、家庭教育に大切なことの10項目を示し、これを社会教育委員が推進している。これまで、10年間取り組んできており、この取組を支えてきたのが地域である。
- ・埼玉県白岡町（現在は白岡市）では、家庭教育に大切なことの18項目を示し、子どもたちを地域で育てなければいけない様々な取組を行っている。また、町においてもアクションプランとして掲げて、リーフレットを配布している。
- ・家庭教育は、地域を挙げて実践することが大切であり、取組を長続きさせるためには、地域も関わって、子育てをする組織づくりが重要である。

[市長]

- ・家庭教育をサポートする仕掛けをどう作っていくのが課題である。

[教育委員]

- ・家庭教育の仕方は、家庭の数だけある。
- ・今回、リーフレットを小中学校に配布したが、その頃は家族での過ごし方がほぼ出来上がっている時期なので、今後、一層、あったか家族の取組を広めていくのであれば、小学校に入学する前の幼稚園・保育園の時期に配布した方が受け入れやすい。さらに、これからお母さんになる方、妊婦さんに配布するのも効果があると思う。さらに、育メン教室において配布することにより、父親が家事手伝いをすれば、子どもが真似ををすると思う。加えて、市の婚活事業のイベントなどでリーフレットを配布すれば、参加者は、家庭をイメージできると思う。
- ・「あったか家族の愛ことば」を、みんなが覚えてくれればいい。

[市長]

- ・中学生のお手伝いの率が低いのは、部活動で忙しかったり、思春期に入ってくる時期だからだと思う。見方を変えて、子どもの立場に立った取組も必要と考える。

[教育委員]

- ・家庭教育の啓発は、教育委員会だけでなく、リーフレットを母子検診時に配布するとなれば、保健センターにおいて、乳幼児編として内容を変えたりするなど、それぞれの年代に応じて、対応できるよう市役所の各部局が連携できる仕組みが必要になってくる。
- ・県においては、子育て応援券が使えるお店では、ピンクの赤ちゃんのマークのシールが貼ってある。本市でも、機運を高めるため、あったか家族応援団マークを作成し、店などに貼って、あったか家族の取組を目視できるようにすればよいと考える。

[事務局長]

- ・このリーフレットは完成品ではなく、保護者側の目から見て、親の考えを提起したものであり、スタート品だと考えている。今後、3年から5年くらいかけて、子どもたちが望む家庭像とのマッチングを繰り返して行きたい。他部局や民間等と連絡を取り合いながら、立派なものにしていきたい。

[市長]

- ・食事、お手伝い、おしゃべりという基本的なものを、うまく浸透を図っていけばよい。

[教育委員]

- ・子どもが望んでいるのは、親の笑顔である。家庭教育について、難しく考えないで、ささいなことから取組、幸せを積み上げていけばよい。

[教育長]

- ・家庭教育というのは、親の笑顔と子どもたちが安心できる居場所をつくってあげることである。安心感が子どもたちの能力を発揮させる。その基盤が親の笑顔であり安心できる居場所である。子どもたちが安心できる家庭を増やしていきたい思いがあり、子どもたちが安心感を実感できる一つの形として、食事、おしゃべり、お手伝いの3つを挙げている。
- ・親、祖父母、地域など子どもたちに関わる人が、結集し支援をしていくことが大切である。
- ・あったか家族応援団を組織し、プロジェクトリーダー的なものも配置し、システムとして取り組んだり、啓発ポスターを作成したり、みんなが当事者として活動できるきっかけになればと期待している。

[教育委員]

- ・ケーブルテレビやFMいみずなどで、家族紹介をしてみてもどうか。

[市長]

- ・今の子ども環境は、核家族化や少子化により近所に同級生の友達がいない状況にあり、コミュニ

ケーションが取りにくい環境にある。だからこそ、あったか家族の取組が重要である。

・今回の委員のご意見や情報も収集しながら、市当局も連携し、より良い家庭を築くことができるよう取り組んでいきたい。

[教育委員]

・新しくできる子育て総合支援センターにも、横断的な取組としてリーフレットを置いておけば、健診に来られた、これから母親になる人たちにも啓発できる。

[市長]

・この施設の所管は、保健センター、子育て支援課であり、しっかりと連携し取り組んでいく。

・教育行政であるから、教育委員会だけで取り組むのではなく、保健センターや子育て支援課などと連携しながら、より効果的にあったか家庭を増やしていきたい。

・加えて、ボランティアや協力隊など地域の支えも巻き込みながら、今後、あったか家庭を多く作っていくことを目標に取り組んでいく。